広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第56号　2007　199－206

「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティに関する研究の動向と展望

山田　みき・岡本　祐子

（2007年10月４日受理）

A Review and Some Considerations on Researches of Identity on Adolescence from View Points of “Individual” and “Relatedness”

Miki Yamada and Yuko Okamoto

Abstract. Studies on the identity of adolescents based on the perspective of “individual” and “relatedness” are reviewed and discussed. Recent experimental investigations to clarify identity from the above standpoint have focused on the development of identity in women. It has been considered that the concept of “relatedness” in identity is particularity related to the identity of women. However, with the recent recognition that “relatedness” is common to both sexes, conceptual discrimination between “individual” and “relatedness,” as well as the relationship between these concepts in development of identity, have become the focus of current discussions. “Relatedness” in adults has been defined from various perspectives. It is considered that “relatedness” in adolescent identity is a factor in promoting the separation of self and others, and in keeping an appropriate distance from others on the basis of trust in the outer world. It is necessary that “individual” and “relatedness” in adolescent identity be elaborated and substantiated on the basis of knowledge gained from previous research with adults.

Key words: identity, adolescence, individual identity, relatedness identity
キーワード：アイデンティティ，青年，「個」としてのアイデンティティ，「関係性」に基づくアイデンティティ

１．はじめに

青年期は，それまでに積み上げてきた「自分」の感覚や同一化を主体的に問い直し，一個の人間として自己を確立する時期である。またそれは，自己の所属する場や関係する他者からの承認を得て，安定したものとなる。一方，現代社会においては，他者との関わりは浅く広く，そして複雑なものになってきている。自己を保障してくれる安定した関係が結びにくいこのような社会の中では，青年が自己を確立するということは，困難にならざるを得ない。伊藤・宮下（2004）は，個性の尊重や自分らしさの発揮などに代表される，日本の西欧化・個人主義化のネガティブな側面に着目し，その中にいる現代の青少年を，“関係性を求めながらも，その関係で傷つき，またその傷を癒すために関係を希求していく”姿として捉えている。「関係性」は，特に人間の発達を理解するための視点として，Erikson（1950 仁科訳 1977/1980）をはじめとする多くの研究者によってその重要性が指摘されてきた。現代の青年の姿を捉えるためには，この「関係性」の視点が不可欠であり，これまでに築かれてきた人間理解の視座としての「関係性」を，現代の青年の姿と重ねることが求められる。

青年心理学研究では，アイデンティティに関する検討が主要な一領域を形成しているが，その中で近年，アイデンティティを「個」と「関係性」から捉える試

みがなされ始めている。本稿では，「個」と「関係性」からアイデンティティを捉えた研究動向について概観し，今後，青年期におけるアイデンティティの形成・確立を「個」と「関係性」の視点から検討するための，課題と研究の方向性について考察する。

2．アイデンティティ概念とMarcia（1966）によるアイデンティティ・ステイタス・パラダイム

アイデンティティとは，Erikson（1950）により提唱された概念であり，“自己の単一性，連続性，不変性，独自性の感覚を意味する”（小此木，2002）。Erikson（1950）は，アイデンティティを“幼児期以来形成されてきた様々な同一化や自己象が，青年期に取捨選択され再構成されることによって成立する，斉一性と連続性を持った自我の状態”とし，青年期の心理社会的課題として，このアイデンティティの確立を挙げた。各先駆的段階において隆盛となった課題への取り組みを終え，青年期に至ってはそれらを統合して自己を社会に位置づけることが求められる。アイデンティティの確立とは，“変化することのない絶対的な「個」としての実態の認識”（鑪・山本・宮下，1984）を持つことであり，主観的側面と客観的側面，個人的側面と社会的側面を同時に有する。つまり，“自分は自分である”という確信を持っており，そのような自分が社会の中で様々な位置づけられ方をしても揺るがないこと，そのような認識を自らが持つと同時に，それが周囲からも保障されていることである。

初期のアイデンティティ研究の中で，以降のアイデンティティ研究に多大な影響を及ぼしたのが，Marcia（1966）によって提唱されたアイデンティティ・ステイタス論である。Marcia（1966）は，アイデンティティを獲得・達成に向かう直線的なものとして捉えるのではなく，その状態をアイデンティティ達成，モラトリアム，予定アイデンティティ，アイデンティティ拡散の４つの様態から捉え，その多様性に目を向けた。その後，このパラダイムは，アイデンティティに関する実証研究において優れた手法とされ，各々のステイタスの背景要因や発達的側面，性差など多岐に渡って検討が重ねられた。

近年のアイデンティティ研究の多くも，Marcia（1966）と同様に，達成－未達成という単一次元ではなく，アイデンティティの多様な状態を捉えようとしてきた。この視点は特に，昨今の複雑な社会のあり様を踏まえてアイデンティティを捉えようとする際に，重要になると考えられる。現代社会においては，アイデンティティの達成・確立そのものの状態像にも幅があることが推測され，その多様性を説明することの出来る，アイデンティティを捉えるための視点を明らかにすることが求められる。後述するように，その１つの視点として，近年，「個」と「関係性」が注目されている。

3．「個」と「関係性」の視点の導入

近年では，アイデンティティを青年期のみに関わるものとして取り上げるのではなく，その発達をライフサイクル全体から捉える研究が増加し，注目を集めている（岡本，1995，1997，1999，2002，2007など）。その背景には，長寿化・少子化などのライフサイクルの変容に代表される現代社会の大きな変化と，それによる成人期以降の発達への関心の高まりや，生涯発達心理学の進展がある。

また，1980年代以降，研究対象を女性に絞ったアイデンティティ研究も散見されるようになってきた。これも，現代社会の変化に伴う女性のライフスタイルの変化やジェンダー問題などを背景に進展してきたと考えられる。この先駆けとなったのが，Josselson（1973）とGilligan（1982 岩男監訳 1986）である。

Josselson（1973）は，48名の女子大学生に対して半構造化面接を実施し，女性のアイデンティティ形成の心理力動的考察を行った。その中で，“女性におけるアイデンティティの確証は，重要な他者の反応に依存している”ことが見出され，女性は，対人関係能力を自分のために価値付け，また様々な人々とうまくやっていくことで，自律の感覚を得るという結論が導かれた。また，Gilligan（1982）も，青年期のアイデンティティや道徳性に関する研究の中で，“女性は他人との関係を通して自分が他人に知られていくうちに，自分を知るようになるということからも分かるように，親密性は女性のアイデンティティ形成に伴っている”と述べている。Josselson（1973）もGilligan（1982）もともに，女性のアイデンティティが男性のアイデンティティと質的に異なっていること，そしてその形成過程においても相違が見られることを指摘した。

このような女性のアイデンティティ発達については，比較的新しい研究の中でも同様のことが述べられている。Halpen（1994）は，青年期女性に対して，アイデンティティ・ステイタス面接とSubject-Object Interviewを実施し，“女性のアイデンティティ発達は，関係からの分離よりも，むしろ関係の中での個体化の過程を含む”と結論付けている。つまり，女性は重要な他者とのつながりを維持し，その中で葛藤に直

面することを通して自己を確立していくという，他者との関係の中での個性化のプロセスが示された。

アイデンティティ発達における性差に着目したHodgson & Fisher（1979）は，大学生を対象にアイデンティティ・ステイタス面接と親密性ステイタス面接を行い，男女それぞれのアイデンティティ発達の過程を比較検討した。その結果，男性と比べて女性のアイデンティティ発達は，遅れているのではなく，異なる経路に従っているという結論が導き出された。

以上のように，女性のアイデンティティ発達は，男性とは異なり関係性の中で進むという見解がいくつか報告されてきた。女性のアイデンティティ発達における対人関係への着目は，その後，性差の検討を経て，男性のアイデンティティの在り方をも捉え直すことに寄与したと言える。つまり，研究の積み重ねにより，“個人内領域（男性）－対人関係領域（女性）という２分法”（杉村，1998）でアイデンティティを理解する図式が導かれたが，その後の研究や女性を取り巻く社会環境の大きな変化によって，この２分法的な見方の見直しが迫られるようになってきた。

例えば高橋（1988）は，アイデンティティ達成と親密性の危機解決に関する性差について検討し，女性は男性より一般に親密性の形成が進展しているが，アイデンティティ高群が低群より親密性ステイタスが高いことからは，女性においても親密性の成熟にアイデンティティの確立が必要であろうと述べている。つまり，Hodgson & Fisher（1979）が言及しているように，男女のアイデンティティ発達が，それぞれ異なる経路に従っている可能性はあるものの，親密性や対人関係能力は，アイデンティティの発達・形成に伴うものであることを示した。

現在では，男女の差異を強調し女性の心理的発達に注目する動きから，性別に関わらずアイデンティティを捉える際に共通する要素としての「関係性」の観点を含むことの有用性が示されている（Archer, 1993; 西川，1994; 杉村，1999など）。すなわち，現段階では，アイデンティティ形成における「関係性」の概念がより重視され，性差によらない人間の根源的なものとして取り入れられるようになったと考えられる。これにより，アイデンティティおよびアイデンティティ形成における「関係性」の視点への関心がさらに高まり，次に述べる「個」と「関係性」からアイデンティティを捉える試みがなされ始めた。

4．Franz & White（1985）の理論

この領域の代表的な研究に，Franz & White（1985）が挙げられる。彼女らは，Erikson（1950）の唱えた精神分析的個体発達分化の図式の第Ⅵ，Ⅶ段階の説明が不足していることを指摘した。そして，一方で，Erikson（1967 岩瀬訳 1982）が内的空間説を提唱していることを踏まえ，精神分析的個体発達分化の図式に関する記述に見られる性差についてのErikson（1950，1967）の考察を再検討し，アイデンティティ発達に愛着の観点を加える必要があると結論付けた。そして，親密性と世代性も他の段階の課題と同様に，発達の初期から存在するというErikson（1950）の考えに基づき，彼女らは，アイデンティティ発達における愛着の先駆的プロセスの精緻化を行った。まず，Erikson（1950, 1967）による各段階の記述を検討し直し，精神分析的個体発達分化の図式の第７行（他の段階での世代性の感覚）と第７列（世代性の先駆）を埋めた。そして最終的に，個体化経路と愛着経路からアイデンティティ発達を捉える“生涯発達に関する複線（two-path）モデル”（Table 1）を理論的に提唱した。

このモデルは，Mahler（1975 高橋他訳 1981）などの対象関係論やSelman（1981）の対人関係的コンピテンスに関する記述を参考にして作成されており，既存の課題のうち，親密性（第Ⅵ段階）と世代性（第Ⅶ段階）は愛着経路に組み込まれ，愛着経路の他の段階の課題と，個体化経路の第Ⅵ，Ⅶ段階の課題が新たに設定されている。Franz & White（1985）によると，

Table 1　Erikson理論を応用した生涯発達に関する「複線」two-pathモデル（訳は鑪・宮下・岡本（1998）による）

	乳児期	幼児前期	幼児後期	学童期	青年期	成人前期	成人期	老年期
個体化経路	信頼 対 不信	自律性 対 恥と疑惑	自発性 対 罪悪感	勤勉性 対 劣等感	アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散	職業及びライフ・スタイルの模索 対 漂流	ライフ・スタイルの確立 対 空虚	統合性 対 絶望
愛着経路	信頼 対 不信	対象及び自己の恒常性 対 孤独と無力感	遊戯性 対 受身性または攻撃性	共感と協力 対 過度の警戒または圧力	相互性・相互依存 対 疎外	親密性 対 孤立	世代性 対 自己陶酔	統合性 対 絶望

この２つの経路は“独立してはいるが相互に関係を持つ”要素であり，“より糸”と表現されている。

このモデルは，第Ⅵ，Ⅶ段階の課題をより精緻にアイデンティティ発達の中に組み込んだものであり，これまでアイデンティティ研究者がしばしば見落としがちであった「関係性」の観点が，アイデンティティ発達において持つ重要性を明らかにしたと考えられる。つまり，ここでは“個体化経路”が「個」の側面，“愛着経路”が「関係性」の側面を表すと考えられる。Franz & White（1985）によると，愛着経路の発達は，信頼に始まり（第Ⅰ段階），自他の恒常性を獲得し（第Ⅱ段階），他者を心理的に独立した存在として認知できるようになり（第Ⅲ段階），次に他者を自律的で相互依存的関係をもつ存在としてみることができるようになり（第Ⅳ段階），第Ⅴ段階の“相互性・相互依存”に至る。この第Ⅴ段階の時期には，他者との相互関係を円滑に進める種々の能力を獲得し，自己と他者の両方の感情に配慮して行動を起こすことができるとされる。そして相互関係を築くことが可能になることが，第Ⅵ段階の親密性や第Ⅶ段階の世代性という他者との新たな形の関係の基礎となると述べられている。このFranz & White（1985）の試みは，実証的な検討はなされていないものの，今後のアイデンティティ研究に新たな展開を生む重要な研究であると考えられる。

本邦においても，岡本（1997）が類似の立場からの見解を示している。岡本（1997）は，成人期のアイデンティティを捉える際に，“個としてのアイデンティティ”と“関係性にもとづくアイデンティティ”の２つの観点の導入が有用であるとし，これらは同等の価値を持ち，互いに影響を及ぼしあいアイデンティティを支えている両輪であると述べている。つまり，アイデンティティにおける「個」の側面と「関係性」の側面を，別の特質を持つ発達経路を経て発達するとしている。この点は，Franz & White（1985）のいう個体化経路と愛着経路に相当すると考えられる。

Franz & White（1985）と岡本（1997）が，「個」と「関係性」はアイデンティティ形成において同等の価値を持つ２つの側面であると主張しているのに対し，Josselson（1994）は，アイデンティティ発達を関係性の文脈から捉え直した。彼女は，アイデンティティの形成過程に見られる関係性のあり方を総合的な見地から検討し，アイデンティティ形成の根底にある自己と他者の間の関係の８つの次元，①抱きかかえ／しがみつき（holding），②愛着（attachment），③情熱的な経験（passionate experience, libidinal connection），④目と目による確認（eye to eye validation），⑤同一化（identification），⑥相互性（mutuality），⑦埋めこみ（embeddedness），⑧慈しみ／ケア（tending, care）を見出した。彼女は，“個体化は，見直された関係性とアイデンティティの統合に通じるコミットメントによって再びなされる”として，アイデンティティ形成において「関係性」を「個」の達成を支える土台になるものとして位置づけている。本邦においても，杉村（1999）が，「関係性」の側面を，アイデンティティ形成を推し進める原動力と考え，Josselson（1994）と同様の立場を示し，検討を行っている。

アイデンティティを「個」と「関係性」の視点から捉える際に，この２つの視点をどのように位置づけるのかについては，現段階で研究者間での相違が見られる。鑪（1974）は，臨床事例をもとにアイデンティティ危機の様態に関する考察を行う中で，危機状態の特徴として“対人関係的距離の定位困難”を挙げている。アイデンティティ危機に陥った青年に，“他人に対して，自分という主体を実感できない”という問題が見られることを指摘し，“自己が他人との関係の中に，対人関係という土壌の中にはっきりと根付くこと，その土壌の中から，何よりも自分の芽を出していることの実感のあることの重要性”に言及している。つまり，ここで鑪（1974）は，自己を根付かせる土壌である対人関係と，そこから“自分の芽”を出している個人としての実感の両方が重要であるとしている。この指摘を踏まえると，アイデンティティを捉える「個」と「関係性」の視点は，Franz & White（1985）や岡本（1997）の指摘するように，相互に独立してはいるが，互いに影響を及ぼしあう，同等の価値を持つ２つの別の側面と捉える方が妥当であると考えられる。

５．青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉える試み

「個」と「関係性」からアイデンティティを捉えようとしたこれまでの研究の多くでは，成人期のアイデンティティに焦点が当てられてきた。しかし，従来からアイデンティティの確立が課題とされる青年期についても，「個」と「関係性」の観点の導入は有用であると考えられる。

杉村（1998）は，青年期のアイデンティティ形成を「個」と「関係性」から捉える試みを行っている。その中では，アイデンティティ形成を他者との意見の相互調整による模索の過程として捉えており，自己と他者の視点の認識によって関係性のレベルを規定している。しかし，青年期におけるアイデンティティの形成・確立を，それまでの様々な同一化対象を能動的に取捨選択し，秩序付け，統合する過程（小此木，2002）と

捉えるならば，アイデンティティを捉える「関係性」の観点とは，認識や認知を前提とした，個人の持つ他者との関係を結ぶ力を表すものと考えられる。上述のJosselson（1994）に対する杉村（1999）の指摘にもあるように，アイデンティティ形成においては，“他者との豊かな結びつきを維持する個人の能力が問われる”のではないだろうか。

これに関しては，鑪他（1984）は，臨床心理学の見地から，“対人的－心理的な距離を保つ能力”という言葉を用いている。また，一丸（1975）も，面接事例からアイデンティティ混乱の臨床像を明確にする中で，その特徴として対人的距離を挙げ，“極端に離れてしまい孤立するか，逆に相手の中に埋没するかのどちらかであり，その適切な距離が保てない”と記述している。

アイデンティティ形成における他者との距離の取り方に関しては，上記の事例から得られた知見以外にも，青年に普遍的に見られる問題として指摘されてきた。特に，青年期を第二の分離-個体化期（Blos, 1962 野沢訳 1971）として捉えた研究において，多くの示唆が得られてきた。

乳幼児期における分離-個体化が，乳幼児が母親表象を内在化し，対象恒常性を確立するまでの過程であるとすると，Blos（1962）の言う第二の分離-個体化過程とは，親からの精神的な自立，つまり依存的な結びつきから離れることを通して，「個」を確立していく過程である。この過程で，乳幼児期に一旦確立された自己表象と他者表象がそれぞれ安定性を獲得し，青年は幼児期に内在化された両親像から離脱し，家族外に新たな対象関係を作り上げるとされ（森田，1998），これは上述したアイデンティティの「関係性」の側面の発達と関わることが推測される。また，このような発想は，Jacobson（1954 伊藤訳 1981）の記述の中にも見られる。Jacobson（1954）は，アイデンティティ形成を第二の分離 - 個体化の過程として捉えた上で，アイデンティティとアイデンティティ感覚の確立により得られる，“環界と個人的かつ社会的相互関係，相互適応，相互満足および相互欲求充足の状態の中で生きることができる”と，“人間の個人的自由と生存，そして環界の中での彼の集団や種族の生存のために，必要なら闘争に訴えてまでも自己主張することができるようになる”という“二重の資質”に言及している。この２つの資質は，それぞれアイデンティティの「関係性」と「個」の側面の成熟した形と考えられ，この２つの観点は，古くから精神分析理論の中で取り上げられてきたことがうかがえる。

他にも，青年期のアイデンティティ形成のプロセスと，乳幼児における分離-個体化の過程との類似性に直接的に言及したBrandt（1977）は，再接近期から個体化の達成までを，それまでの同一化対象（両親，幼児的親表象）から手を離し，新たな同一化対象（家族以外の他者，現実の両親を反映する新たな親表象）の手を取ることができるようになる過程と捉え，離れることの難しさを述べている。そして，最終的には，個体化とアイデンティティの達成は，内在化された対象を放棄するだけでなく，両親を現実の人間として見，新しい様式で関係を形成・維持することと結論付けている。

分離-個体化の過程とアイデンティティ形成のプロセスとを対比させた論考においては，特に両親との関係に着目されているものの，青年期以前とは異なる，対象との距離の持ち方や維持の仕方という点では，アイデンティティにおける「関係性」の側面と類似すると考えられる。

アイデンティティを確立する，つまり自己表象を明確で納得のいくものにしていくためには，良いと思う他者の特性を自己表象に取り込んだり，自己表象にそぐわない他者の特性を切り離したりする必要があると考えられる。つまり，「個」と「関係性」からアイデンティティを捉える際，「関係性」の側面には，上述した内的・外的に他者と関係を結び維持し，時には切り離すことの出来る能力が含まれることが求められる。

一方，アイデンティティにおける「関係性」の側面を上述のように捉えるとすると，「個」の側面とは，鑪（1974）の言う“自分の芽”を作り伸ばす力と考えられる。また，Franz & White（1985）に基づくと，自律性や勤勉性など，自分の身体運動的な側面に対する統制力や発動力に収斂される。

山田（2006）は，Franz & White（1985）に基づき，青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」から捉えることを試みた。そこでは，「個」としてのアイデンティティは，自己の能力に対する信頼感を基盤に，「個」を確立し，独立した個人として存在する方向へ発展していく特徴を持つ側面とされ，「関係性」に基づくアイデンティティは，自己を取り巻く世界への信頼感を基盤に，他者と関係を築く能力を獲得し，他者との相互的な関係を結ぶ方向へ発展していく特徴を持つ側面とされている。それぞれ３下位因子から構成される「個」としてのアイデンティティ尺度と「関係性」に基づくアイデンティティ尺度が作成されたが，概念間の区別が明瞭にはならなかった。しかし，面接調査の結果，「個」と「関係性」のバランスによって，対人関係のあり方に相違が見られ，この視点の有用性が

示された。今後，面接調査で得られた結果を，尺度の改訂に生かすことが望まれる。

他に，青年期を対象にアイデンティティを「個」と「関係性」から捉えることを試みた研究として，宗田・岡本（2005）が挙げられる。宗田・岡本（2005）は，山本（1989）に基づき，“「個」尺度”と“「関係性」尺度”を作成した。宗田・岡本（2005）では，「関係性」に複数の次元が存在するとし，それらを包括的に捉えることを試みているが，作成した尺度の因子的妥当性と信頼性には検討の余地が残っている。

以上のように，青年期のアイデンティティを捉える視点として「個」と「関係性」を用いることは未だ導入段階であり，古くから理論的な研究は進められているにも関わらず，実証研究はほとんどなされていない。また，数少ない実証研究においても，実証化の過程で概念の定義や尺度作成に関する問題点が残っている。まずは概念の整理を行い，「個」と「関係性」を理論的に分離し，その上で測定に適切な項目を選定し，尺度の妥当性と信頼性を確認していくことが求められる。

6．今後の研究の展望

これまで述べてきたように，現時点で最も重要な課題は，アイデンティティにおける「個」と「関係性」の概念の精緻化である。女性特有のアイデンティティ発達に見られる「関係性」ではなく，1980年代後半から検討が始められている，男女に共通する視点としての「関係性」の概念をアイデンティティ論に組み入れるためには，その意味するところを明確にし，「個」の概念との相違や「関係性」の側面の独自の発達を示す必要がある。

本稿では，Franz & White（1985）と岡本（1997）を取り上げてその点について述べた。Franz & White（1985）は，Erikson（1950, 1967）の記述を再吟味し，アイデンティティ発達を“個体化経路”と“愛着経路”から捉えることを理論的に提唱した。それにより，親密性と世代性の課題が，アイデンティティ発達の中により明確に位置づけられたと言える。Franz & White（1985）の論考では，自分自身への信頼や自律性を核に個人としての自己の確立に向かう「個」の側面と，自己を取り巻く世界への信頼感や自他の分化と関わりを核に他者との相互的な関係の確立に向かう「関係性」の側面の発達が明瞭に示されている。

一方で，Josselson（1994）や杉村（1998）は，「個」を包含するものとして「関係性」を捉えており，同じ「関係性」と言っても，個人内だけではなく，個人に与えられる環境をも視野に入れている。その場合，「関係性」に基づくアイデンティティは個人に還元されるものではなく，個人を含む環境全てに関わるものとなり，個人のアイデンティティの感覚の範疇を越えてしまう可能性がある。この相違の統合を試みているのが，岡本（2007）である。そこでは，「関係性」の側面は，その下位概念である“個体内関係性（内在化された他者像）”と“社会的関係性（具体的な自己と他者との関係性）”から捉える必要があると述べられている。岡本（2007）によると，この２つは質が異なり，生涯に渡って並行して発達する。このように，「関係性」の側面を個体内的な部分と社会的な部分とに分離して捉えることで，「関係性」の側面を整理する試みもなされ始めている。

今後，青年期を対象に「個」と「関係性」からアイデンティティを捉える際には，鑪（1974）や一丸（1975）の臨床心理学的な知見を踏まえると，岡本（1999, 2007）の言う“個体内関係性”がより重視されると考えられる。そのように考えると，青年期における「関係性」に基づくアイデンティティとは，“他者との豊かな結びつきを維持する個人の能力”（杉村，1999），内在化された対象を現実の人間として見，新しい様式で関係を形成・維持する能力（Brandt, 1977），“対人的－心理的な距離を保つ能力”（鑪他，1984）などにより表される，内的・外的な他者と関わり，その距離を維持する個人内の力といえるのではないだろうか。これを理論的に具体化したのが，Franz & White（1985）の愛着経路であると考えられる。今後，Franz & White（1985）の理論モデルの実証的研究を進めていくことが求められる。

概念の精緻化に次ぐ今後の研究の課題として，アイデンティティを「個」と「関係性」から捉えた実証研究の積み重ねも求められている。山田（2006）や宗田・岡本（2005）では，質問紙法による尺度構成が主に行われているが，語りやイメージを用いた手法でのアプローチも有効であると考えられる。その理由として，先述したように，「関係性」に基づくアイデンティティを“内的・外的な他者と関わり，その距離を維持する個人内の力”と考えるならば，それを捉えるには，力動的な視点が不可欠と考えられるからである。また，鑪（1974）や一丸（1975）のような事例研究による検討は，現代を生きる青年の実像をより生き生きと映し出し，心理臨床場面での青年に対する援助に直接結びつく可能性が高いと考えられる。

以上のように，アイデンティティを「個」と「関係性」からみたアイデンティティの研究領域には，数多くの課題が残されている。しかしこのことは逆に，こ

の領域における今後の研究の発展可能性を示唆していると考えられる。まずは「個」と「関係性」の概念を整理し，実証研究を進め，その上で現代の青年を理解し援助する視点として成熟させていくことが望まれる。

【引用文献】

Archer, S. L. (1993). Identity in relational contexts: A methodological proposal. In Kroger, J. (Ed.) *Discussions on ego identity*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 75-99.

Brandt, D. E. (1977). Separation and identity in adolescence: Erikson and Mahler － Some Similarities. *Contemporary Psychoanalysis*, **13**, 507-518.

Blos, P. (1962). *On adolescence: a psychoanalytic interpretation*. New York : Free Press.
（ブロス，P. 野沢栄司（訳）（1971）．青年期の精神医学　誠信書房）

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
（エリクソン，E. H. 仁科弥生（訳）（1977/1980）．幼児期と社会Ⅰ・Ⅱ　みすず書房）

Erikson, E. H. (1967). *Identity: Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton.
（エリクソン，E. H. 岩瀬庸理（訳）（1982）．アイデンティティ――青年と危機――　金沢文庫）

Franz, C. E. & White, K. M. (1985). Individuation and attachment in personality development: Extending Erikson's theory. *Journal of Personality*, **53**, 224-256.

Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge MA: Harvard University Press.
（ギリガン C. 生田久美子，並木美智子（共訳）岩男寿美子（監訳）（1986）．もう一つの声――男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ――　川島書店）

Halpen, T. L. (1993). A constructive-developmental approach to women's identity formation in early adulthood: A comparison of two developmental theories. *Dissertation Abstracts International*, **55**(3-B), 1201.

Hodgson, J. W. & Fisher, J. L. (1979). Sex Differences in Identity and Intimacy Development in College Youth. *Journal of Youth and Adolescence*, **8**, 37-50.

一丸藤太郎（1975）．自我同一性混乱の臨床像に関する一考察――臨床心理学的観点からみた青年期の諸問題（第三報）――　広島大学教育学部紀要　第一部，**24**，181-191.

伊藤美奈子・宮下一博（編著）（2004）．シリーズ荒れる青少年の心　傷つけ傷つく青少年の心　北大路書房

Jacobson, E. (1954). The Self and the Object World. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **9**, 75-127. New York: International Universities Press.
（ジェイコブソン，E. 伊藤洸（訳）（1981）．自己と対象世界　岩崎学術出版社）

Josselson, C. E. (1973). Psychodynamic Aspects of Identity Formation in College Women. *Journal of Youth and Adolescence*, **2**, 3-52.

Josselson, C. E. (1994). Identity and Relatedness in Life Cycle. In H. A. Bosma (Eds.), *Identity and development: An Interdisciplinary approach*. Thousand Oaks: Sage. pp.81-102.

Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant*. New York: Basic Books.
（マーラー，M. S.，パイン，F.，& バーグマン，A. 高橋雅士・織田正美・浜畑　紀（訳）（1981）．乳幼児の心理的誕生　黎明書房）

Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.

森田　慎（1998）．青年期の自立をめぐる「さびしさ」の体験の意味ついて――心理的融合と分離不安――京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践センター紀要，**2**，59-71.

西川隆蔵（1994）．青年期におけるパーソナリティの開放性――閉鎖性に関する研究－自己の２面性，及び自己評価との関係について――　教育心理学研究，**42**，281-290.

岡本祐子（1995）．成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について――理論的展望と生活レベルに見られる２，３の問題――　広島大学教育学部紀要 第二部，**44**，145-154.

岡本祐子（1997）．中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版

岡本祐子（編著）（1999）．女性の生涯発達とアイデンティティ　北大路書房

岡本祐子（編著）（2002）．アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房

岡本祐子（2007）．アイデンティティ生涯発達論の展開　ミネルヴァ書房

小此木啓吾（2002）．現代の精神分析――フロイトか

らフロイト以後へ――　講談社学術文庫
Selman, R. L. (1981). The Development of Interpersonal Competence: The Role of Understanding in Conduct. *Developmental Review*, **1**, 401-422.
宗田直子・岡本祐子（2005）．アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討――「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み――　青年心理学研究，**17**，27-42.
杉村和美（1998）．青年期におけるアイデンティティの形成――関係性の観点からのとらえ直し――　発達心理学研究，**9**，45-55.
杉村和美（1999）．現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達．岡本祐子（編）女性の生涯発達とアイデンティティ　北大路書房　pp. 55-86.
杉村和美（2001）．関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求――２年間の変化とその要因――　発達心理学研究，**12**，87-98.
高橋裕行（1988）．同一性と親密性の危機の解決における性差――自我同一性地位の Rasmussen の EIS による併存的妥当性の検討――　教育心理学研究，**36**，210-219.
鑪幹八郎（1974）．自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察　広島大学教育学部紀要　第一部，**23**，329-342.
鑪幹八郎・山本力・宮下一博（共編）（1984）．アイデンティティ研究の展望Ⅰ　ナカニシヤ出版
鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編）（1998）．アイデンティティ研究の展望Ⅴ－１　ナカニシヤ出版
山田みき（2006）．「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティの検討――対人関係の様相から――　広島大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）．
山本里花（1989）．「自己」の二面性に関する一研究――青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討――　教育心理学研究，**37**，302-311.